

# 中国の少数民族におけるキリスト教受容に関する研究

—雲南省禄勸県イ族（彝族）の村落を中心に—<sup>1</sup>

徐 亦 猛

## はじめに

周知のように中国は、悠久の歴史をもつ文明国の一つであり、約 56 の民族からなる多民族国家でもある。中国の長い歴史をふりかえると、少数民族問題は常に歴代王朝にとって社会安定を行うための最重要問題であり、1949 年の「中華人民共和国」成立以後も、政府が解決すべき最優先課題として位置づけられてきた。現代の一部の中国少数民族においてキリスト教の広がりが非常に著しく、この現象は、中国少数民族の宗教研究においてきわめて興味深い課題である。従来、それぞれの文化、伝統が異なる中国の少数民族の宗教的基盤は伝統的な原始宗教であった。しかし、一部の中国の少数民族の間に非常に浸透しているのは、少数民族の伝統的な原始宗教や絶大的な影響力をもつ儒教、道教、仏教などといった漢民族の伝統的な民間信仰ではなく、西洋文化の根源であるキリスト教である。キリスト教は外来の宗教として、中国少数民族の伝統的な原始宗教、道德規範、既に形成されていたライフスタイル、及び少数民族の本来の文化と社会的構造に深刻な影響と衝撃を与えたのは、間違いない。中国西南部に位置する雲南省は、25 の少数民族が居住する中国で最も複雑な地域である。さらに、雲南省における諸少数民族は祖先を人間の力で神のように信仰して崇拜し、この信仰と崇拜で民族の生活方法を支配し、自分自身の行為を規範するために、独特な雲南宗教文化を形成した。雲南省本土の少数民族は長期的につづく閉鎖的な環境の中で暮らしているので、伝統的な原始宗教が保留されてきた。清朝末期から各時代中国政府はこの地の少数民族に様々な同化政策を行ってきたが、少数民族の子弟に儒教と道教の思想と信仰儀式を押し付けたことが根幹である。しかしこの地では、少数民族の伝統的な原始宗教の社会的基盤が非常に強かったため、漢民族の宗教と文化は終始諸少数民族からの頑強な抵抗を受け、今日まで普及してこなかった。

こうした歴史的、社会的背景のもとに、なぜ西洋の宗教と呼ばれるキリスト教は中国の少数民族において急速に成長しているのか。中国の少数民族の信仰状況はどのよ

---

1 本研究は 2014 年度科研費（研究課題番号：JP26770030）により実施されたものである。

うであるか。本論文は、雲南省禄勸県のイ族（彝族）を中心としてフィールドワークを行い、上記の問題点について包括的に考察し、解明すると同時に、今後の中国の少数民族におけるキリスト教のありかたを探ることを目的とする。これは、現代の中国の少数民族におけるキリスト教の変遷発展について理解を深める上で、重要な意義がある。

1980年代から中国大陆の研究者の間では、中国雲南省少数民族の宗教問題に関する研究も非常に活発化になり、研究水準の高い専門著作と論文が相次いで出版された。中国大陆の研究者たちは、歴史学、宗教学の視点から研究を行っている。中国民族事務委員会と中国社会科学院の共同研究のもと、『雲南民族民俗和宗教調査』、『雲南少数民族社会歴史調査資料集』、『雲南民族情況集』、『基督教与雲南省少数民族』などの専門著作が相次いで刊行された。著作の中に民族宗教に関する一次資料が多く収録されているため、雲南省少数民族の宗教問題を研究する際、欠かせない参考文献である。

キリスト教関連資料を収録したものとしては、銭寧編『基督教与少数民族文化変遷』（雲南大学出版社、1998年）、韓軍学著『基督教与雲南少数民族』（雲南人民出版社、2000年）、秦和平著『基督宗教在西南少数民族的传播史』（四川人民出版社、2003年）などが挙げられるが、これらの主たる内容はキリスト教の広がりや影響、現状報告で、事実の叙述にとどまっている。

中国香港の建道神学院のキリスト教と中国文化研究センターは、雲南少数民族のキリスト教受容に対して力を入れ、豊かな成果を挙げられた。楊学政、刑福増編『雲南基督教传播及現状調査研究』、蔡錦図著『戴德生与中国内地会』においては、主に特定の宣教団体（中国内地会）及び所属の宣教師たちに重点を置き、少数民族への宣教活動の実態を明らかにした。

一部外国の研究者も、中国の少数民族の宗教の研究について注目してきた。A.J.Broomhall, *Hudson Taylor and China's Open Century*; Alwyn Austin, *Millions: The China Inland Mission and Late Qing Society*; David Anthony Huntley, *The Withdrawal of the China Inland Mission from China* などにおいて、主に戦前中国内地会の宣教師たちから残された日記と回想録を使って、20世紀初期のキリスト教が中国雲南省少数民族社会への影響と結果、そして現地の原始宗教との関連について論じた。しかし中国国内の少数民族の宗教調査の制限によって、実際の現地のデータと一次資料の不足により、外国の研究者は理論的論述に留まっている。

いずれにしても、これらの研究者たちは、過去の歴史文献と資料を中心に、雲南省における少数民族のキリスト教受容について検証するだけである。現代の少数民族社会（特にイ族）において、キリスト教はどのようにして原始宗教を超え、少数民族の間で著しく広がったか、少数民族はどのような動機のもとにキリスト教を受容したか

などの重要な問題については、ほとんど言及していないので、具体的な現代の中国の少数民族のキリスト教的状況を把握することは限界があると言えるであろう。

以上の先行研究の問題を焦点としつつ、本論文は宗教学的、歴史学的方法を用いて、文献資料の分析とフィールドワークの考察を通して、中国雲南省少数民族のキリスト教受容の全体像を明らかにすることを試みた。本論文は主に以下の種類の文献から資料を収集している。

一、地方档案資料及びイ族歴史資料。例えば、『雲南文史資料』、『禄勸県文史資料』などである。

二、中国内地会からの刊行物。例えば、内地会の宣教師の活動、教会の規模、信徒の数などが記録されている『億萬華民』(China Millions)である。

三、すでに整理され出版された国内外の雲南少数民族に関する研究論文と論著。

四、フィールドワークにおいて得られる一次データ。

本調査は筆者が交通の不便な山岳地域である中国の雲南省昆明市禄勸県の管轄する一つのイ族の村落に住み込み、現地の研究協力者を通して、村のイ族の住民と信頼関係を築き、観察、インタビュー、活動参加という伝統的な研究方法を通して、キリスト教信仰をもつ住民たちの日常生活とキリスト教礼拝活動を綿密に記録することを試みたものである。その調査から得られる一次資料とデータを駆使し、理論的な分析を通して、中国の少数民族の宗教的状況を把握することを目指したい。

## 一、イ族における原始信仰

イ族は中国において最も古い、人口の多い少数民族の一つであり、中国西部の古羌の子孫である。イ族は南東チベットから四川を通り雲南省に移住してきており、現在では雲南に最も多く居住している。

イ族の祖先たちは長い歴史の流れにおいて、絶えまない努力によって、文字、文化、文学、芸術など豊かな文化系統を形成した。イ族は厳しくかつ複雑な奴隷制度をもっている。同じイ族の中では、黒イ(奴隷主階級)と白イ(奴隷階級)に分けられていた。白イは他民族(苗族)などと同じように奴隷として扱われたが、高位の奴隷であるゆえ、自分の土地を耕すことを許され、自分の奴隷を所有したり、時には自由を買い取ったりすることができていた。

伝統的なイ族の精神構造において、宗教は中心的な地位を占めた。先祖から継承されたイ族の宗教は、社会の変化に伴って一定の変化を遂げた原始宗教である。雲南省社会科学院宗教研究所の楊学政の「原始社会における民衆の意識、行為、精神、物質

すべては、原始宗教の中に含まれている」<sup>2</sup>という定義に則せば、イ族のキリスト教受容を考察するためには、まずこの原始宗教を分析する必要がある。

伝統的なイ族の原始宗教は主に自然崇拜と精霊信仰である。彼らにとって、山、樹木、竹、茶などといった大自然はすべて霊である。毎年各季節において、様々な祭りを通し、天の神、地の神、石の神、山の神、火の神に対して敬意を表し、福を求めることは、原始宗教の中心部分となる<sup>3</sup>。

さらに、精霊信仰において、昔のイ族にとって、「影」は「魂」であった。彼らは肉体以外の自分の影を、「霊」或は「魂」と連想した<sup>4</sup>。「霊」或は「魂」は人間が生きている時には肉体に附着するが、人間が死んだ後は、肉体から遊離しこの世に生存することもできる。イ族の靈魂概念は天国、地獄、輪廻転世の意識を形成する段階までには至っていない。彼らは靈魂の庇護を願い、その祟りから免れたい時に、死者のために安霊の儀式を行い、彷徨わないように靈魂を鎮める。3－5年が経つとさらに壮麗の儀式を行って、靈魂を送り出し、祖先のところへ赴き、そこで安らかな楽しい生活を送らせる<sup>5</sup>。この「靈魂不滅」の觀念は、イ族の祖先崇拜に思想的基礎を提供した。イ族にとって、肉体のままであの世にいる祖先のところには行けないが、魂のみは現実の世界からあの世に渡れる。祖先のところへ行くには、導き手が必要であり、導きがなければ、魂は祖先のところに行けず、彷徨う鬼になる。その導き手の役割を果たしたのは、ピモ（毕摩）というイ族の宗教教職者である。ピモはイ族の世襲の司祭であり、巫師である。男子に限って任ずることができ、一般に家伝と学習とを経てはじめてなることができる<sup>6</sup>。各家庭の儀式や部族を祭る集団の儀式においてピモが登場し、信者を集めていただけだけではなく、この世とあの世の橋渡し役でもある。ピモは太鼓を叩いて精霊（祖先）を呼び、その精霊（祖先）と人間との仲介役（宗教的な役割）を果たすほか、イ族の伝統文化の宣伝者でもある。イ族の言葉でピモは「教師」という意味をもつ。彼らは文化や知識に習熟し、イ文字で書かれた經典に精通し、また天文暦法、地理、系図、倫理、神話伝説などに関するイ族の典籍を熟知する。そのため、ピモはイ族社会における宗教活動に従事する神と人間の意思の媒介者であるだけでなく、社会における知識を主管する存在でもある。ピモはイ族の民衆との生活と多方面にわたってつながりを持ち、イ族社会において、極めて重要な存在である<sup>7</sup>。

2 楊学政『原始宗教論』、雲南人民出版社、1991年、1頁。

3 白发兴『彝族传统禁忌文化研究』、云南大学出版社、2006年、81-82頁。

4 戴佩丽、朱文旭等編『彝文文献研究』、中央民族学院出版、1993年、第301-302頁。

5 覃光広等編著、伊藤清司監訳、王汝瀾訳『中国少数民族の信仰と習俗 上巻』、第一書房、1993年、338-339頁参照。

6 同上、345頁。

7 同上、345頁。

イ族は雲南において有力な支配層であるが、漢民族と比べると、経済も文化も権力分配も大変遅れていると言わざるを得ない。文化的遅れによって、現実の環境を変革するための精神力と知識技能の支持を得られなければ、人々は伝統的な模式と自然からの支配に従属するだけである。そのため、イ族は自然に祖先から伝えられてきた原始宗教に頼るしかなかった。従って、自然崇拜と精霊信仰が中心になる原始宗教は、イ族の社会生活上の主要な文化となる<sup>8</sup>。物質と文化の乏しい社会において、原始宗教の役割は死、病、飢餓、洪水などの人生問題に対応する能力を強化することである。悲劇、危機に出会った時、原始宗教はイ族の民衆に慰め、安全感、生命の意義を与え、貧困と欠乏を解決し、乏しさからもたらされた挫折感を償った。イ族にとって、原始宗教は、あらゆる幸運と不幸に適応する最も大切な手段であり、彼らの独自の生活の現実や乏しい経験から生まれたのである。

## 二、中国内地会におけるイ族へのキリスト教伝道

19 世紀後半、プロテスタント宣教師は相次ぎ雲南省に入り、大都市部において宣教活動を展開したが、わずかな成果しかあげられなかった。中小規模の町に宣教活動を転じて、漢文化の強い影響で、キリスト教徒の増加は非常に緩やかであった。しかし 19 世紀末、滇（雲南の別称）西北部の大理、東北部の昭通などで、英国循道公会、中国内地会の宣教活動が活発に行われるに従い、苗族、イ族の信徒数は急速に成長し、漢民族の信徒数を超えるに至り、驚くほどの大きな成果をあげた<sup>9</sup>。1881 年中国内地会の宣教師クラーク（George Clarke 克拉克）は上海からいったんビルマを経由して大理に入り、最初のプロテスタント教会を建てた。その二年後、同じ中国内地会のイギリス人宣教師サリバン（Samuel Thomas Thorne 索理仁）が上海から四川の宜賓を経て雲南に入り、雲南の東北部の昭通、東川で宣教活動を行い、教会を設立した<sup>10</sup>。

筆者が調査した禄勸県イ族地域においては、英国循道公会より中国内地会のほうが伝道活動に成功した。その地域では主に内地会所属のオーストラリア人宣教師ポーデス（Gladstone Charles Fletcher Porteous 張爾昌）夫妻の影響力は非常に大きかった。ポーデス夫妻は内地会の宣教師として、1904 年にオーストラリアから中国の広州に到着した。その時、内地会イギリス人宣教師アデーム及び英国循道公会宣教師ポラードは

8 栗原悟『雲南の多様な世界』、大修館書店、2011 年、192 頁。

9 徐亦猛「中国の少数民族におけるキリスト教の受容に関する研究—雲南省禄勸県の苗族（ミャオ族）を中心に」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第 46 号、明治学院大学キリスト教研究所、2014 年 1 月、5 頁。

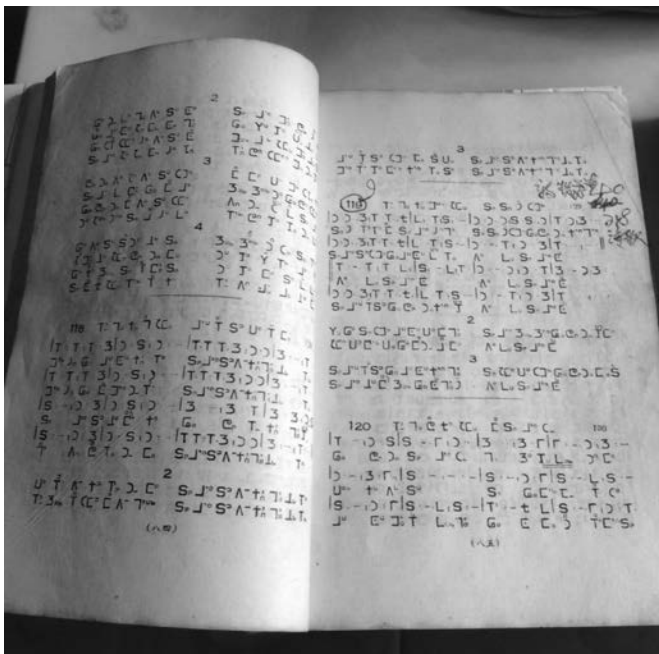
10 原誠「中国・雲南省のプロテスタント・キリスト教についての一考察」『基督教研究』第 67 巻第 1 号、同志社大学神学部、2005 年、82-84 頁参照。



すでに雲南、貴州の苗族地域において、宣教活動を大成功させていた。雲南地域の宣教師仲間を支援するため、1906年ポーデス夫妻は内地会によって、武定県撒普山の苗族地域に派遣された。ポーデス夫妻は内地会の宣教方針に従い、現地の文化と言葉を非常に重視した。彼らは漢民族の服装から苗族の民族服装に改め、周りの苗族の知識人から苗族の言葉を熱心に勉強した。約10年間の宣教努力の末、武定県撒普山の苗族地域にある程度の固い宣教基盤を築いた。教会の苗族のキリスト者の勧めによって、ポーデス夫妻はイ族を宣教の射程に入れた。1916年ポーデス夫婦が武定県撒普山から禄勸県撒老鳥のイ族地区に宣教にきた。ポーデス夫妻は医療と教育などの宣教活動を通して、イ族地区のキリスト教基盤を固めるために働いた。当時、この地区に住むイ族は貧しく病人も多かったので、ポーデス夫妻は、自身の医学知識及びオーストラリアから持ってきた医療器材を活かし、病人の治療を行いながら伝道に努め、イ族の信頼を得た<sup>11</sup>。彼らの病人の中に、大きな影響力をもっていたイ族の宗教指導者ピモもいた。ポーデス夫妻の導きによって、ピモはキリスト教へ改宗し、彼らの多くの追従者もキリスト教へ改宗し、大きな集団改宗運動の波が禄勸県のイ族地区において広がっていた。ポーデス夫妻によって提供された医療活動は大きな役割を果たし、西洋の医学や薬は、現地のイ族改宗者に、人間のコントロール能力を超えた病や自然

環境によりよく対応する方法を提供すると同時に、彼らの伝統的な原始宗教がキリスト教に比べて効果的でないことを示したと考えられる。

イ族が積極的にキリスト教に改宗したのは、主に以下の原因である。第一に、宣教師の働きがある。多くのイ族の改宗者が現れた中、ポーデス夫妻はこの辺鄙な場所に生活するイ族こそ、苗族に続いて、自分の宣教理想



イ族語の讃美歌

11 Lachlan Strahan, *Australia's China: Changing Perceptions from the 1930s to the 1990s*, p. 111.

を達成する最もよい対象であると理解し、積極的にイ族のための教会を建てた。ポーデス夫妻は禄勸県の撒老烏でイ族撒老烏総教会を成立し、禄勸県下の各地に合計 52 の支部教会を建て、イ族の中にキリスト者を増やした。ポーデス夫妻はイ族に聖書の知識を普及させるため、英国循道公会宣教師ポラードにおける苗族への宣教方法を倣い、撒老烏総教会をはじめ、支部教会にも小学校を建てるに至った。一時的に小学校の在籍生徒数は 500 人を数えるに至ったが、経済困難のため 1927 年には大半が閉校を余儀なくされた<sup>12</sup>。キリスト教の土着化の観点を絡み合せて、ポーデス夫妻は、これからのイ族地域において、イ族のキリスト者が宣教師の代わりに自分の同胞に宣教することを備え、神学校を設立する必要があると実感した。ポーデス夫妻は、内地会本部及び他教派の宣教団体に宣教レポートを送り、イ族に対する宣教の重要性や宣教効果を訴えながら、経済支援を求めた。ポーデス夫妻の熱い思いや色んな教派からの理解と財政の支援によって、1944 年撒老烏でイ族をはじめとする 6 族の連合西南神学校が設立された。この神学校は専門的に少数民族のために現地の伝道者を養成することに力を入れた。

もともとイ族は固有の文字があったが、歴史・神話・伝説・習慣や規則、日常の知識の多くは伝統的な宗教教職者ピモのみ精通して、一般のイ族は全く文字を読めない状態にあった。ポーデスは苗族のキリスト者の助けを得て、ポラードが創った苗族の文字（ポラード式）をベースにして、イ族語のローマ字表記法を考案した。その後この表記法はほかの宣教師たちによる修正を経て、ポラード式のイ族文字として確立された。ポーデスはポラード式のイ族文字を用いて、新約聖書や讃美歌をイ族語で翻訳し、印刷してイ族のキリスト者に配った<sup>13</sup>。このように、ポーデス夫妻はイ族に向けて、ポラード式のイ族文字に基づき、教育と識字活動を行い、イ族キリスト者の質の向上に努めた。

第二に、イ族自身の動きが挙げられる。イ族の神話・伝説には天地を創造した最高神や靈魂不滅が含まれているが、実際に聖書の教えと似ている。宣教師はイ族に聖書の話をも自分の民族の神話として解釈し、キリスト教が先祖の信仰であると認識させた。そのため、イ族のキリスト者にとって、キリスト教は民族の救いと希望であり、しばしば自らを旧約聖書のイスラエルの民になぞらえ、亡国、離散、放浪、漢民族の支配による民族の苦難を語る。イ族のキリスト者はこの普遍宗教であるキリスト教の様々な教えの中でも、抑圧された少数民族としての自らの苦難の歴史に説明や救済の可能

12 雲南編集組編、「禄勸県訪問資料」、『中央訪問団第二分団 雲南民族情況 汇集 上』、雲南民族出版社、1986 年、56-57 頁。

13 Joakim Enwall, *A Myth become Reality: History and Development of the Miao written language*. Institute of Oriental Languages (Stockholm University, 1995) p. 241.

性を与えてくれるような要素に特に関心を抱き、それらを好んで取り上げる。さらに、イ族のキリスト者にとって、西洋の宣教師は旧約聖書の中の預言者であり、神は宣教師たちを遣わし、彼らを通して、イ族の元来の姿、すなわち漢民族の支配から解放される強いイ族が再建されると信じた。

第三は、経済構築の改善である。漢民族による残酷な搾取がもたらした経済基盤の脆弱性に加えて、強烈な鬼神観念に基づく自然崇拜、祖先崇拜、精霊崇拜などの祭祀活動で精霊や祖先に献げる生贄として、子牛や羊など家畜を大量に屠殺したり、祭祀活動期間中の大量飲酒の習慣によって、イ族の経済は深刻な影響を受けていた。毎年の祭祀活動に莫大な財力をつぎ込み、巨額な借金を背負い、家計を破たんさせる例が後を絶たなかった。そのため、イ族の富の蓄積は非常に遅れ、生活が一層貧困になっていた。しかし、ポーデス宣教師は中国内地会の宣教方針「自治・自養・自伝」に基づいて、現地のイ族教会を独立させるため、イ族信徒に厳格にキリスト教教義を教え、様々な戒めを守るように求めた。次第にイ族キリスト者はキリスト教に対する理解を深め、冠婚葬祭における伝統的な精霊信仰からキリスト教の神に取って代ったため、莫大な浪費を必要とする伝統的な祭祀活動、生贄にされた子牛や羊などの家畜の供養、大量飲酒や婚姻売買が禁止されたので、物質的、精神的な生活状況が改善された。こうしてイ族のキリスト教への改宗の確信はさらに高められたのである。

### 三、雲南省禄勳県团街鎮 L 村落におけるキリスト教の受容

2015 年 9 月、筆者は中国の雲南省昆明市禄勳県の管轄する一つの村落において現地のフィールドワークを行った。禄勳県は昆明市の北部に位置し、昆明市の管轄地の一つである。県人民政府所在地屏山鎮は海拔 1679 メートル、平均気温 15.9 度で、昆明市から約 90 キロの距離がある。禄勳県が直接管轄する鎮、郷は全部で 16 存在する。禄勳県は東西 69 キロ、南北 105 キロ、4249 平方キロメートルの面積と 24 民族の約 42 万人の人口を擁している。山岳地域は全面積の約 9 割を占めている。調査対象である L 村落は、禄勳県团街鎮管轄地に含まれる山岳地域のイ族村落である。昆明市の西北部の郊外海拔 2350 メートルの場所にあり、昆明市から約 100 キロの距離がある。全村には 38 戸 200 人あまりの農家があり、ほぼ全部イ族である。L 村は禄勳県において中規模なイ族自然村である。村落の場所は辺鄙的であり、交通状況も大変不便であるため、L 村落の経済は他の地域の同規模の漢民族村落と比べれば、多少遅れている。村落の栽培と養殖業も発達していないし、主な農作物はトウモロコシ、小麦、ジャガイモであり、畜産業についても農家は自家用の牛、羊、豚などを飼っているのみである。村落の全体の平均年収は 3000 元（約 6 万円）未満であるので、貧困地域とも



言われる。

村の初代キリスト者たちはほぼ亡くなっているので、直接彼らからの証言を取ることができなかった。しかし、現在の村の年配者たちから彼らの親世代のキリスト教状況についての話を聞くと、20 世紀初期、一人の苗族のキリスト者の影響によって、キリスト教が芽生え始め、1920 年代に村の最初の入信者が現れた。この苗族のキリスト者は武定県撒普山で中国内地会宣教師ポーデスの導きで入信し、キリスト教について勉強したが、後にポーデス夫妻と共に禄勸県撒老烏に来て、イ族に向けて伝道するため撒老烏付近の村落へ出回った。村の最初の入信者はもともと深刻な病気に悩まされて、全財産を原始信仰に賭けても、病気が治されず、家で死を待つ中、村に伝道に来た苗族キリスト者と出会って、祈ってもらった後、奇跡的に回復し、キリスト教に入信した。その後、彼は苗族キリスト者を案内して村のあちこちに伝道をして回った。ある日、ちょうど何人かの国民党兵士たちが村に入って、略奪騒動を起こした。中国語ができる苗族キリスト者は国民党兵士に立ち向かい、理を説いた。国民党兵士は事態が拡大することを恐れて、何も取らず村から出た。国民党兵士さえキリスト教信者を恐れていることを見て、多くのイ族住民はキリスト教に対して好感を持ち始めた。その後、苗族キリスト者の呼びかけによって、ポーデス宣教師も何回も村に訪れ、キリスト教宣教活動を行った。苗族キリスト者の辛苦の末、村のキリスト者人数が増え、村の教会も成立され、1925 年中国内地会からの援助によって、最初の礼拝堂が建てられた<sup>14</sup>。

20 世紀初頭、二つの文化が同時にイ族社会に入って来た。一つは国民党を代表とする政治文化であり、もう一つは宣教師から持たされたキリスト教文化である。国民党を代表する政治文化は武力によって、イ族の民衆を抑圧する。国民党政府はイ族に様々な同化政策を行ってきたが、その政策は、現地に学校を設立し、イ族子弟に漢民族文化を押し付けるものであった。国民党政府の関心は、単なる政治的支配であり、現地のイ族の民衆とほとんど交流しないため、イ族は終始自分の伝統的な原始宗教を放棄せず、漢民族の文化に対して、頑強に抵抗した。イ族にとって、政治文化は自分の生活を改善するのではなく、過酷な税金が科せられるものであった。以前の生活や物質水準は低いが、イ族は地方の有力者であり、かなり自由な生活を送っていた。しかし、国民党の支配によって、イ族の信仰、生活は深刻な衝撃を受けた。

しかし、キリスト教文化はこの苦しい生活環境において傷ついたイ族の心を慰めることができた。西洋の宣教師やイ族キリスト者はイ族の人々と共に生活し、彼らの苦しみを顧み、このような無私な奉仕や友好関係を築けたことが、入信者が現れる大き

14 その礼拝堂は文化大革命中、破壊された。

な原因であると推測する。

#### 四、L 村落におけるキリスト教の現状

禄勳県にあった筆者のフィールドワーク調査のイ族 L 村落では、少数の他民族の婚入者を除いて、成人のほとんど全員が洗礼を受けたキリスト者で、世帯単位に見ると、全世帯がキリスト教世帯であった。イ族村落の日常生活のレベルにおいては、外部からのキリスト者の訪問がほとんどない、通常の交流はイ族のキリスト者同士にほぼ限られていた。

村落の教会は、隣接する三つの村落を管理する中心集会拠点である。現在の礼拝堂は外部の漢民族のキリスト者の献金によって建てられた。村の教会は、国に認可された三自愛国教会の傘下に置かれたが、村の経済の遅れが原因で三自愛国教会から派遣された牧師は駐在しなかった<sup>15</sup>。従って、礼拝においては、ほとんど教会のリーダー格の執事、礼拝長二人が普段順番に独自の聖書の解釈による集会の説教を担当する。

村落教会の組織の中で、最も重要な地位は村教会の 40 歳後半の執事とその妻である。村落教会の司牧の仕事は執事夫婦でペアとなって行うものと一般に認められて



イ族礼拝の様子

いる。しかしイ族の教会の執事には専業でそれを行う者はほとんどなく、日曜日やその他の日の礼拝や儀礼の時以外は、他の村人と同様に農業などの仕事を行っている<sup>16</sup>。執事は村落におけるすべてのキリスト教儀礼を執り行う中心人物であるが、「婦人会」や「聖歌隊」の行事においては、執事の妻が中心となる。筆者の調査村で、L 村落教会の執事夫妻は中学校と小学校卒業者で、村落においては高学歴者であった。彼らは正規な神学教育を受けなかったが、年二回約

15 鎮の中心教会において、イ族の牧師は駐在しているが、24 軒の附属村落教会を各教会に回りきれないため、各村落の教会管理、聖礼典の執行などをすべて教会の執事に委ねる。

16 ただし、賃金労働など、他者に使われる仕事を村教会の指導者が行うのは恥ずかしいこととされる。

二週間程度、鎮の中心教会の牧師のもとで聖書など特別な神学訓練を受ける<sup>17</sup>。執事夫妻は、礼拝や宗教儀礼の他の場面でも日常生活においては、村の住民への知恵ある助言者のごとく振舞っていた。

村落の教会組織は、三自愛国教会の政策に従って、教会委員会、婦人会、聖歌隊からなる。政策では、この3つの組織それぞれに、会長の役職が設けられることになっているが、実際には、村落の教会が小さな集団だったこと、リーダーシップが発揮できる人材の不足や、都市部への出稼ぎのため長く村を留守にしている者がいたことから、役職の多くは空席のゆえに、執事夫妻、礼拝長が兼任している。執事は教会の全般的な働きを計画し（特に洗礼、聖餐の執行）、礼拝長は教会の礼拝を計画し、執事の妻である聖歌隊隊長は讃美の曲を選び、聖歌隊の指揮を執るのである。執事と礼拝長は共同で会計の働きを担い、教会の収入と支出を記帳し、教会の現金を管理する。

村の経済状況は良くないため、住民による執事を支えるための経済貢献はできなかったが、教会の基本的な活動を維持するため最低限の献金を教会から住民に求めている。本来、イ族のキリスト者は収入や収穫の十分の一を教会に献金する義務があった。この十分の一献金は、日曜日の教会の執事と礼拝長による説教でもしばしば繰り返し強調された。聖書の教えによると、人間側の得たものの十分の一は神に属するものであり、教会運営などを含む教会の活動のために使われるべきものだということであった<sup>18</sup>。村落教会への支出のほかにも、キリスト者たちはさらに、個人或いは世帯単位で、隣接の教会、三自愛国教会本部への様々な献金が求められていた。しかし、実際には、教会への献金状況は芳しくなかったもので、教会の財政はいつもぎりぎりであった。

#### 日曜日の礼拝の時間割り

礼拝開始時刻	礼拝
午前 6 時半	朝の礼拝
昼 12 時半	昼の礼拝
午後 7 時	夜の礼拝

正式な集会は金曜日の夜及び日曜日に行われている。畑の仕事があるので、金曜日の夜の集会は 7 時半から始まる。集会が始まる前に、キリスト者同士は互いに握手という挨拶をする。集会はおおよそ 1 時間程度であり、主に讃美、証し、祈りである。

17 鎮の中心教会は各村落の教会を管理するため、定期的に教会の執事、礼拝長からの報告を聞き、彼らに聖書勉強をさせる。

18 旧約聖書マラキ 3：10 参照。

集会終了後、参加者たちは日曜日礼拝のため、会堂清掃を行った後、解散になるが、特に祈りを必要とする参加者が出たら、教会の責任者が何人かの熱心な信徒を呼んで一緒にその人のために祈るのである。

キリスト者として住民は日曜日には教会の礼拝に参加する。日曜日の礼拝には普段よりきれいな服装をして参加する人が多く、女性も化粧をしたり、イ族の伝統的な民族服を着て参加する者もいる。日曜日の晴れやかな雰囲気は、はっきりと言明されないものの、実質的に前日からすでに始まっていた。土曜日に軽い仕事で済ませたり、日曜日の食事を事前に用意したりする者が多く見られる。

日曜日において、朝昼晩三回の礼拝を開く。日曜日の日の出の前に、朝の礼拝を開催する。執事夫妻と礼拝長は、教会のドアを開け、清掃し、新しい花を入れた花瓶を説教台の上に置き、全村に向けて教会放送（讃美歌）を流し、村民に礼拝開始を知らせ、礼拝参加を促す。教会の放送を聞いたキリスト者住民は、ゆっくりと教会に向かい、教会放送を流して15分も経ってからようやく礼拝が始められる。朝の礼拝参加者はL村落の住民だけである。礼拝の流れは讃美、説教、祈りという1時間弱の集会である。礼拝終了後、各自解散し、自分の家に戻って、朝食を取る。

昼の12時半からの礼拝は、日曜日の礼拝の中で一番主要な礼拝である。この礼拝には、隣村のキリスト者も参加に来るので、人数は朝の礼拝の2倍以上になる。乳児と幼児を抱いた女性たちは、礼拝堂の一番後ろに座って参加しているが、時々、幼児たちが叫びながら後ろで走り回ったり、乳児が泣いたりしていた場合も多く見られた。昼の礼拝が多くのキリスト者が集まる機会であるため、毎月の聖餐もこの時に行う。また教会の執事は、鎮の中心教会から指示や教会献金の催促などの連絡事項を伝えることもあった。昼の礼拝は教会の執事また隣村教会の執事によって司式され、聖書の朗読、執事による牧会祈祷、村教会の聖歌隊による讃美、執事による説教などからなっていた。昼の礼拝は日曜日の3回の礼拝の中で最もながく、1時間から1時間半にも及ぶ。礼拝後、約30分かけて、互いに挨拶したり、世間話をしたり、祈ったりするのであって、その後、解散する。

夜7時から約1時間弱をかけて、夜の礼拝が開かれ、この礼拝の参加者は再びL村落の住民だけである。多くの礼拝参加者はこのような礼拝に参加することによって、信徒同士の間で交流が出来、心が満たされ、文化的な娯楽活動とレジャースポットの不足による生活の単調さも消えてゆく、と礼拝参加者は語っている。

また金曜集会と聖日礼拝のほかに重要な不定期に催される新生児の命名、結婚式、葬式など一生の節目の儀式がある。さらに、正月祭、イースター、感謝祭、クリスマスなどの年間の定期行事において、隣接の姉妹教会と合同礼拝や食事会など活動を行う。

そのほか、村のキリスト者は外の世界から押し寄せる新しい経済文化と社会情勢の波に埋もらされないため、キリスト者の信仰を高めるため、村教会は現地の雨季の農閑期を利用し、聖書の勉強会を開き、多くのイ族キリスト者に聖書の知識を普及させた。

## 結論

以上のフィールドワークにおいて観察したように、雲南省禄勸県のイ族の改宗から約百年もの長い歴史が経ち、キリスト教はイ族の価値観と社会構造に大きな変化をもたらしながら深く浸透し、キリスト教改宗以前に見られた原始宗教の実践の多くがキリスト教によって代替されている一方で、キリスト教はイ族民衆の普段の生活の重要な一部分になっている。急速な社会変革や経済の高度な発展によって、都市部や漢民族と違い、イ族は社会の一番底辺に取り残されている。彼らの精神生活を支えるのは、地元の政府ではなく、宣教師が伝えたキリスト教である。イ族キリスト者は、キリスト教の様々な教えの中で、抑圧された少数民族として彼らの経験してきた苦難に対して説明と救済の可能性に関する側面に特に関心を抱く、より多くの民族成長の空間を得られたと言えるのである。

本稿では論じ得なかったが、例えば、イ族の伝統文化とキリスト教の関係や融合などの分析課題が残されている。今後はそれらに取り組みつつ、イ族社会におけるキリスト教化の状況について検討を進めたい。